■目次

・大峰山（おおみねさん）
・大峰山護持院（おおみねざんごじいん）
・修験道（しゅげんどう）
・山伏（やまぶし）
・役行者（えんのぎょうじゃ）
・大日如来（だいにちにょらい）
・陀羅尼（だらに）
・真言（しんごん）
・現世利益（げんぜりやく）
・講
・修行スケジュール
・持ち物
・注意事項
・メモ・・・
・真言の音声

大峰山（おおみねさん）
広義には奈良県吉野の大峰山脈の諸峰の総称で、狭義にはその北部にある山上ヶ岳（さんじょうがたけ）（1719 メートル）をさす。大峰の地名は山上ヶ岳にある大峰山寺に由来する。大峰山脈は東は吉野川、北山川、西は十津（とつ）川で限られた南北約 50 キロメートルの山地で、北は吉野山から南は玉置山（たまきやま）に及ぶ。最高峰は八剣山（はっけんざん）（1915 メートル）。壮年期の峻峰（しゅんぽう）が連なり「近畿の屋根」とも称される。吉野熊野国立公園に属す。山上ヶ岳は 7 世紀後半に役行者（えんのぎょうじゃ）が開き、9 世紀後半に聖宝が中興した修験道（しゅげんどう）の霊山として知られ、山頂には蔵王権現（ごんげん）を祀（まつ）る大峯山寺（本堂は国の重要文化財）があるほか、鐘掛岩、西の覗（のぞき）岩、東の覗岩、蟻戸（ありど）渡りなどの行場がある。山上ヶ岳から南へ弥山（みせん）、釈迦ヶ岳（しゃかがたけ）を経て下北山村前鬼（ぜんき）へ至る道は難所が多く、奥駈（おくがけ）道とよばれる。現在も女人禁制を守っている。天川（てんかわ）村洞川（どうがわ）から登るのが一般的なルート。

大峰山護持院（おおみねざんごじいん）
大峰山を護持している寺の事で、大峰山寺・桜本坊・金峯山寺・喜蔵院・東南院の五つの寺が有ります。
中でも桜本坊は大峰山行者講社本部として、大峰山の山伏（行者）の得度・先達号授与等司ります。

修験道（しゅげんどう）
日本古来の山岳信仰が、外来の密教、道教、シャーマニズムなどの影響のもとに平安時代末に至って一つの宗教体系をつくりあげたものである。このように修験道は特定教祖の教説に基づく創唱宗教とは違って、山岳修行による超自然力の獲得と、その力を用いて呪術（じゅじゅつ）宗教的な活動を行うことを旨とする実践的な儀礼中心の宗教である。

修験道の淵源（えんげん）は、奈良時代に仏教や道教の影響を受けて、山岳に入って修行し、陀羅尼（だらに）や経文の一部を唱えて呪術宗教的な活動を行った在俗の宗教者に求めることができる。のちに修験道の開祖に仮託された役小角（えんのおづぬ）もこうした宗教者の一人である。平安時代になると山岳仏教の隆盛とも相まって、天台・真言の密教僧のうち加持祈祷（かじきとう）の能力に秀でた者は、験を修めた者――修験者――とよばれた。また山伏ともよばれた。中央の修験者は熊野（くまの）や吉野（よしの）の金峰山（きんぶせん）を拠点として、ここから大峰山（おおみねさん）に入って修行した。

山伏（やまぶし）
修験道（しゅげんどう）の宗教的指導者。山岳で修行することによって超自然的な力を体得し、その力を用いて呪術（じゅじゅつ）宗教的な活動を行う宗教者で、山に伏して修行することから山伏といわれた。山臥とも書く。また験を修めた者という意味で修験者、一宗一派によらず諸山を歴訪することから客僧ともいわれる。教義的には、山伏の山の字は報身・法身（ほっしん）・応身の三身即一、伏は人と犬の 2 字を組み合わせるゆえ、無明（むみょう）（犬）法性（ほっしょう）（人）不二（ふに）を示すとされている。この 2 字によって山伏が大日如来（だいにちにょらい）と同一の性格をもち、成仏しうる存在であることを説明しているのである。

山伏は鈴懸（すずかけ）を着、結袈裟（ゆいげさ）をかけ、頭に斑蓋（はんがい）と頭巾（ときん）、腰に貝の緒（お）と引敷（ひっしき）（坐具（ざぐ））、足に脚絆（きゃはん）を着けて八つ目の草鞋（わらじ）を履き、笈（おい）と肩箱（かたばこ）を背負い、腕に最多角（いらたか）の数珠（じゅず）を巻き、手に金剛杖（こんごうづえ）か錫杖（しゃくじょう）を持って法螺（ほら）を吹くという独自の服装をしている。教義上では、鈴懸や結袈裟は金剛界と胎蔵界、頭巾は大日如来、数珠・法螺・錫杖・引敷・脚絆は修験者の成仏過程、斑蓋・笈・肩箱・貝の緒は修験者の仏としての再生というように、この衣装の着用によって、山伏が大日如来や金胎の曼荼羅（まんだら）と同じものとなり成仏しうることを示すと説明されている。山伏がもっとも活躍したのは中世期で、吉野（よしの）（奈良）、熊野（くまの）（和歌山）、白山（はくさん）（石川・岐阜）、羽黒（はぐろ）山（山形）、英彦（ひこ）山（福岡）などを跋渉（ばっしょう）して修行、加持祈祷（かじきとう）や調伏（ちょうぶく）などの活動を行い、戦乱などの際は従軍祈祷師や間諜（かんちょう）として活躍した。しかし近世以降は遊行（ゆぎょう）を禁止され、町や村に定着して巷（ちまた）の祈祷師的存在になっていった。

中世期になると、このうち熊野の修験者は天台宗寺門派の聖護院（しょうごいん）を本山にいただいて本山派とよばれる宗派を形成した。また金峰山を拠点として大和（やまと）（奈良県）の諸社寺に依拠した回国修験者は、中世末には真言宗の醍醐（だいご）三宝院の後ろ盾のもとに当山（とうざん）派とよばれる宗派を形成した。このほか、羽黒山（はぐろさん）、英彦山（ひこさん）など諸国の山岳にもそれぞれ独立の宗派が形成された。これらの宗派は、それぞれ峰入（みねいり）を中心とした儀礼や、その意味づけとしての教義や独自の組織をつくりあげて、宗教面のみならず政治的にも軍事的にも大きな力をもっていた。しかしながら近世以降、修験者は地域社会に定着し、庶民の現世利益（げんぜりやく）的な希求にこたえて、加持祈祷、呪法、符呪などの呪術宗教的な活動に従事した。近代初頭、修験道は明治政府の修験道廃止令によって廃止され、修験者は天台・真言両宗に包摂された。しかしながら第二次世界大戦後相次いで独立し、現在は本山修験宗（総本山聖護院）、金峯山（きんぷせん）修験本宗（総本山金峯山寺）、真言宗醍醐派（総本山三宝院）、修験道（総本山五流尊

滝院（そんりゅういん)）などの教団を中心に活発な活動を行っている。

役行者（えんのぎょうじゃ）
7 世紀後半の山岳修行者。本名は役小角（えんのおづぬ)。役優婆塞（えんのうばそく）ともいう。日本の山岳宗教である修験道（しゅげんどう）の開祖として崇拝され、江戸末期には神変大菩薩（じんぺんだいぼさつ）の諡号（しごう）を勅賜された。多くの奇跡が伝えられるので、実在を疑う人もあるが、『続日本紀（しょくにほんぎ)』文武（もんむ）天皇 3 年（699）5 月 24 日条に、伊豆島に流罪された記事があり、実在したことは確かである。多くの伝記を総合すれば、大和（やまと）国（奈良県）葛上（かつじょう）郡茅原（ちはら）郷に生まれ、葛城山（かつらぎさん）（金剛山）に入り、山岳修行しながら葛城鴨（かも）神社に奉仕した。やがて陰陽道（おんみょうどう）神仙術と密教を日本固有の山岳宗教に取り入れて、独自の修験道を確立した。そして吉野金峰山（きんぶせん）や大峰山（おおみねさん)、その他多くの山を開いたが、保守的な神道側から誣告（ぶこく）されて、伊豆大島に流された。この経緯が葛城山神の使役や呪縛（じゅばく）として伝えられたものである。彼が積極的に大陸の新思想や新呪術を摂取したことは、新羅（しらぎ）や唐に往来したとする伝承にうかがうことができ、その終焉（しゅうえん）も唐もしくは虚空（こくう）に飛び去ったとされている。

大日如来（だいにちにょらい）
真言（しんごん）密教の教主。大日とは「偉大な輝くもの」（サンスクリット語マハーバイローチャナ Mahvairocana の訳。摩訶毘盧遮那（まかびるしやな）と音写）を意味し、元は太陽の光照のことであったが、のちに宇宙の根本の仏の呼称となった。『大日経』『金剛頂経（こんごうちょうぎょう)』など真言密教のもっとも重要な経の教主。思想史的には『華厳経（けごんきょう)』の毘盧遮那如来が大日如来に昇格したものと推定されるが、前者は経中で終始沈黙しているのに対し、後者は教主であるとともに説主でもある。普通、仏の悟りそのものの境地は法身（ほっしん）といわれ、法身は色も形もないから説法もしないとされる。けれども大日如来は法身であるにもかかわらず説法し、その説法の内容が真言（語)、印契（いんげい）（身)、曼荼羅（まんだら）（意）である。法身大日如来がこのような身・語・意の様相において現れているのが三密加持であり、これが秘密といわれるのは、この境地は凡夫（ぼんぶ）はもちろんのこと十地（じゅうじ）（菩薩（ぼさつ）修行の段階を 52 に分け、そのなかの第 41 から第 50 位をいう）の菩薩もうかがい知ることができないからであるとされる。しかし真言行者は瑜伽観行（ゆがかんぎよう）によってこの生においてこの境地に至るとされ、これは大日如来と一体になることを意味する。ゆえに大日如来は究極の仏でありながら衆生（しゅじょう）のうちに内在する。仏の慈悲と智慧（ちえ）の面から胎蔵界・金剛界両部の大日が説かれる。

陀羅尼（だらに）
能（よ）く総（すべ）ての物事を摂取して保持し、忘失させない念慧（ねんえ）の力をいう。サンスクリット語ダーラニーdhra の音写。「保持すること」「保持するもの」の意。陀憐尼（だりんに）、陀隣尼（だりんに）とも書き、総持、能持（のうじ）、能遮（のうしゃ）と意訳する。一種の記憶術であり、一つの事柄を記憶することによってあらゆる事柄を連想して忘れぬようにすることをいい、それは種々な善法を能く持つから能持、種々な悪法を能く遮するから能遮と称する。普通には長句のものを陀羅尼、数句からなる短いものを真言（しんごん）、一字二字などのものを種子（しゅじ）という場合が多い。『大智度論（だいちどろん）』巻五には、聞持（もんじ）陀羅尼（耳に聞いたことすべてを忘れない）・分別知（ふんべつち）陀羅尼（あらゆるものを正しく分別する）・入音声（にゅうおんじょう）陀羅尼（あらゆる音声によっても左右されることがない）の 3 種陀羅尼を説き、略説すれば五百陀羅尼門、広説すれば無量の陀羅尼門があるとする。また、『瑜伽師地論（ゆがしじろん）』巻 45 には、法陀羅尼・義陀羅尼・呪（じゅ）陀羅尼・能得菩薩忍（のうとくぼさつにん）陀羅尼（忍）の 4 種陀羅尼があげられており、『大乗義章』巻 11 にはこの四陀羅尼について詳説されている。また、不空（ふくう）訳の『総釈陀羅尼義讃（そうしゃくだらにぎさん）』には 4 種の持としての陀羅尼が説かれ、法持（ほうじ）・義持（ぎじ）・三摩地持（さんまじじ）・文持（もんじ）の別が説かれている。

呪を陀羅尼と名づけるところから、呪を集めたものを陀羅尼蔵、明呪蔵（みょうじゅぞう）、秘蔵（ひぞう）などといい、経蔵、律蔵、論蔵、般若（はんにゃ）蔵とともに五蔵の一つとする。諸尊や修法に応じて陀羅尼が誦持（じゅじ）される。密教では、祖師の供養（くよう）や亡者の冥福（めいふく）を祈るために尊勝（そんしょう）陀羅尼を誦持するが、その法会（ほうえ）を陀羅尼会（だらにえ）という。

真言（しんごん）
密教における仏菩薩（ぶつぼさつ）などの本誓（ほんぜい）（人々を救済しようとするもとの願い）を表す秘密語、密呪（みつじゅ）。サンスクリット語のマントラ mantra の訳。呪（しゅ）、神呪（しんしゅ）などとも。比較的短い呪を真言、長い呪を陀羅尼（だらに）という。思念する意のマンという動詞に、器を意味するトラが結成したと解されるので、思念の器を原義とする。また、思念する意のマンと、守護するまたは救済する意のトラーとの合成とみて、思念する者を救済すると解される。マントラは古代インドの聖典『アタルバ・ベーダ』などでは種々の呪的な言詞をさし、その多くは呪術を伴うものであった。

密教はこの語を取り入れて、真言は諸仏菩薩などのことばとして用いられ、真実な語を意味するようになった。真言を説く諸尊の種別から、(1)如来（にょらい）説、(2)菩薩金剛（こんごう）説、(3)二乗（声聞（しょうもん）乗、縁覚（えんがく）乗）説、(4)諸天説、(5)地居天（じごてん）説に分類する。(1)(2)(3)は聖者の真言、(4)は諸天衆の真言、(5)は地居天衆の真言という。また、(4)(5)をまとめて諸神の真言ともいう。真言の頭初には帰依（きえ）を表すオーム om（(おん)）またはナマス namas（南無）を冠し、末尾には吉祥（きっしよう）を意味するスバーハ svh（蘇婆訶（そわか））の語を用いる場合が多い。

現世利益（げんぜりやく）
神仏などの加護によりこの世で得られる利益のこと。仏教では、『法華経（ほけきょう）』『金光明経（こんこうみょうきょう）』『薬師経（やくしきょう）』などの大乗経典で強く説かれ、祈祷（きとう）、読経（どきょう）、念仏などにより、延命、息災、治病などの利益が得られるとされる。とくに密教では加持（かじ）祈祷による現世利益が強調された。また日本の民間信仰やそれを基盤に生まれた新宗教は、現世利益をその基調とする。ただ、仏教のたてまえが現世利益を第二義的なものとしていることもあって、現世利益中心の信仰は「ご利益信仰」と蔑称（べっしょう）されることが多い。

講
講（こう）とは、同一の信仰を持つ人々による結社である。ただし、無尽講など相互扶助団体の名称に転用されるなど、「講」という名称で呼ばれる対象は多岐に渡っている。

元々の講は「講義」「講読」の「講」であり、平安時代に仏典を講読・研究する僧の集団を指すものであった。後に仏典の講読を中心とする仏事（講会）を指すようになり、さらに各種の仏教儀式一般に講という名称をつけるようにもなった（報恩講など）。

この「講」が中世ごろから民間に浸透する過程で、様々な信仰集団に「講」という名称がつけられるようになった。信仰集団としての講には、地域社会の中から自然発生的に生まれたものと、外部からの導入によるものとがある。前者の講は、氏神・産土といった地域の神を信仰する氏子によって、その神祠の維持のために運営されるものである。社格の高い神社の講では、「村」の範囲を超えて広い範囲に構成員を持つものもある。

講は講社ともいい、講の構成員を講員という。講の運営にあたっては講元(こうもと)、副講元、世話人などの役員を置き、講員の中か選任され、講の信仰する寺社から委嘱されるのが通常である。

外部からの導入による講は、当初は山岳信仰に関するものであった。立山などの修験者が霊山への登山を勧めて全国を廻り、各地に参拝講が作られた。それにならって各地の神社・寺院へ参拝するための数多くの講も作られるようになった。これらの参拝講では、講の全員が参拝に行く「総参り」もあったが、多くは講の中から数人を選び、代表して参拝する「代参講」が行われていた。

相互扶助団体（頼母子講・無尽講）への転用は、この代参講から派生したものである。すなわち、皆で金を出しあって、参拝に行くのではなくその金をくじや入札によって構成員に融通するというものである。

「南無神変大菩薩・南無大日大聖不動明王・あびら　うんけん　そわか」
紀州の熊野古道を含め大峰山と連なる修験道の山々が世界遺産に登録されました。
女人禁制の大峰山は奈良県と和歌山県の境に聳える 1,719mの山で、別名山上ケ岳と呼ぶ修験者の山でもあります。大阪からバスで約３時間、途中車が１台しか通れない渓谷沿いの山道を抜けると温泉宿場町の洞川（どろがわ）に辿り着きます。修験者が入山時に宿泊する修験講で賑う町で温泉も格別。奇麗な水が流れる小さくて素敵な町です。

6 月 6 日(金)

6:00　集合 京都駅八条口貸切バス乗降場
　　(京都駅の南側、アバンティ向かいが目印です)

6:30　出発
　　途中トイレ休憩（黒滝道の駅)

9:40　洞川 到着（龍泉寺門前で全員一旦下車)

10:00 ■男性陣 水行

11:00 龍泉寺 出発

11:20 大峰山登山口 到着（全員一旦下車)

11:30 ■男性陣 登山開始（女性陣は、見送り後バスに乗車し龍泉寺へ)

12:00 ●女性陣 お宿の角甚(かどじん)に到着
　　荷物を降ろし着替え、龍泉寺さんにて水行と滝行

13:30 ●女性陣 昼食 角甚(かどじん)にて

14:30 ●女性陣 龍泉寺にて護摩行

15:30 ●女性陣 天河神社へ参拝

16;50 ■男性陣 下山開始(予定)

18:30 ●女性陣 男性陣お迎えのためバスにて大峰山登山口へ移動。

19:00 ■男性陣 下山到着(予定)

19:40 お宿到着 夕食、入浴、就寝。

6 月 7 日(土)

5:00　起床、徒歩にて龍泉寺へ

6:30　水行開始
　　■男性陣は水行と滝行 角甚さんにて着替え。
　　●女性陣は水行

8:00　龍泉寺にて柴燈護摩 少・中先達授与式

8:45　朝食
　　自由時間

10:00 お宿の角甚(かどじん) 出発

11:00 高鴨神社 正式参拝

13:00 大神神社 正式参拝

13:40 昼食 大神神社(昭和の間にて)

14:20 大神神社 出発

16:00 京都駅前到着（時間は前後します)

持ち物

・一泊の着替え(男女)

・リュックまたはウエストポーチ(男性)
お山に登る時に持参するもの
おにぎり(当日お配りします)、水分(ペットボトルまたは水筒)、タオル、御朱印帳、貴重品、他。

・装束、杖(男性)
初めての方はこちらでご用意いたします。

・水行時の下着(男女)
龍泉寺さんで水行を行います。

※男性は初日到着時に水行、翌日早朝に水行と滝行を行います。
男性の水行時は、白衣の下に下着は着用しません。

※女性は、男性がお山に登っている間に水行と滝行を行います。
白衣の下は水着を着用してください。

・お山に登る男性の下着
下着類は身を清める白いシャツ、白い靴下、白いパンツをご用意ください。
(女性はその限りではございません。)

注意事項

●貴重品の管理は自己責任でお願いいたします。

●貴重品は落とさないようにウエストポーチまたはリュック等で身に付けてください。

男性の場合、行場では貴重品等、胸ポケット等から落とす可能性がございます。もし落とした場合は下は谷底ですので回収不能です。

●行は無理をしないようにしてください。水行またはお山の行場は強制ではございません。

体調がすぐれない場合は必ず申し出てください。
お山の行場は、回り道がございます。

大峰山は多くの講（グループ）が入りますますので、美鈴社講と他の講と間違えないようにお願いいたします。

●各行場では山先達さんの言う事をよく聞いて手足を運んでください。
行くも行けず、引くに引けずになる場合があるようです。
行場は険しい岩場が多いので、身体を運ぶ時は３点法（動かす手足以外はしっかりと岩を捉えている事）を守って乗り越えてください。

真言の音声
下記からダウンロードできます。

龍泉寺さんで収録させていただいた真言の音声です
般若心経
不動明真言
光明真言
般若心経
こちらからダウンロードできます。
http://misuzusp.jp/oyakata/singon20100712.mp3

修行当日までに資料を見ずに唱えられるようにご準備ください。

なかでも、不動明王真言はうろ覚えのまま水行やお山の行に臨むのはかなり危険なこととなりますので、当日までに必ず覚えてください。

ご不明な点などございましたら、お気軽に親方！までお問合せください。
よろしくお願いいたします。

以上です。

親方！